
スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

黒神王輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

【Zコード】

N7655Y

【作者名】

黒神王輝

【あらすじ】

勇者というものを、御存知だろうか。

礼儀正しく、打倒魔王とかそんなものに燃えて、国の奴隸として安っぽい金と装備で街を放り出される可哀想なヤツである。

そんな勇者の称号を嫌々ながらに習得したキルシユは、その王道展開を悉くぶつ潰していくのだった。

変態シモネタ上等！ 御都合満載、メタさ満載、イケメン美少女変態満載のくたばれ正統勇者ファンタジー。勿論、シリアルなんてぶつ潰します。

序章 ハーレム&逆ハーレム（前書き）

ライト&メタの新境地を開く為の実験台です。

序章 ハーレム＆逆ハーレム

旅立ちには、理由が付き物だ。

本当の理由に、建前で蓋をして、尤もらしい事をでっち上げる。事、勇者に関しては、八方美人的な意識が必要になるという。世界の平和を守りますー、とか。魔王を退治しに行っちゃうよー、とか。聞けば、大半は魔王に金を貢いで影を潜めてもらつていてとか。夢も希望も勇気も無い話だ。けど、現実である。

しかし、残念ながら勇者はなろうと思つてなれるものではなく、血統である事が多い。その所為で、国王や村人達に良い顔をしなければならないと言う強制が目立つてているのだ。示しがつかないとか、いいじやんどうでも。俺の生活を動かす為には、全く関係ないし。

「勇者よ……勇者キルシユよ」

「あー……？」

呼ばれて、適当に返事をしつつ向き直ると、むさり苦しい鬱面が目に映る。

こんな何の変哲も無い、無駄に鬱だけが立派なステレオタイプの国王なんて、もう時代遅れだろ？ 新進気鋭の爽やかな王でも嫌だが……うん、女王様がいいよ。皆大好きだろ？

口づちの態度に咳払いをして、王は無駄に低い声で言葉を発する。普段の間抜けな声音とは、えらい違ひだ。

「キルシユ。お主は剣が得意ではなかつたな。熱心に我が国エメラキスカ王国の象徴である風の魔術を学び、そしてどんな人物ともいや、傭兵と親しくしていたな。そこで、得るものがあつただろう？」

「当然っ！ 究極のスカートめぐりに挑戦すべく魔術を学び、傭兵からは女の落とし方、ムフフなテクから楽しい楽しい小話にピッキング技術！ 軽い身のこなし方も教わつたぜ！ 後、足音や気配を消す方法とかな！ これで風呂とか覗き放題……悲願成就も近いぜ

つ！」

ガツッポーズを力ツコよく決めるこぢりを、何故か苦々しい表情で王は眺めていた。

「……勇者というよりも、なんだか盗賊になつとらんか？ それも、かなり雑魚臭がしておりそくな……」

「あ、パラメーター見る？」

「え！？ 見れるの！？」

名前：キルシユ

L V : 1

職業：勇者（笑）

ステータス

体：16

力：6

速：10

技：10

守：3

魔：14

運：255

特殊技能

スカートめぐり一級、魔術・風、魔術・水、魔術・炎、傭兵心得、盗賊の心得

「どうよー！」

「どうよ……ではないわア！」

流石に頭にきたらしく、王は顔を真つ赤にして怒鳴りたててくる。五月蠅い。

「そもそも何故パラメーターが出せる！ そして勇者に（笑）がついてあるぞ！ それにスカートめぐり一級だけ明らかに浮いてある！ 後、運がカンストじやああああ つ！！ もつと別の能力があるじやろおおおおお つ！！

「じゃあ、勇者らしいパラメーターって何だよ つ！！

「え……体力が高く、力もあり、守備もある」

「んで、足が臭い。超水虫」

「何故じやつ！？」

「あーあー、うつせえうつせえ。んで、俺に何の用？ アンタ、俺嫌いじやん。娘とかに近づけさせてくんないし」

「あつたりまえじや！ スカーレットなら五億万歩譲つて紹介してやらん事も無いが、お前は不真面目すぎるー。あやつも大概だったがな！」

勇者一族に生まれ、その次男として育った自分。

兄であるスカーレットが勇者の任につくはずだったのだが、勇者として魔物の集落を討伐しに行き、そのまま帰つてこなかつた。だから、次男である俺が寄越された始末。

無論、そんなのはお断りだ。女の子とイチャイチャしてたい俺にとって、勇者の使命なんざ邪魔でしかない。

夢はでつかく、ハーレム王。あ、俺……今、真理に気付いたかもしない。

「英雄色を好むって言つだろ？」

「そうじやな」

「俺、超英雄じやね！？」

「お主はただの色狂いじや……。ウチの使用人達のスカートが、何回スカートめぐりの犠牲になつたか、考えたくも無い」

「でも、アンタそれ見て鼻血吹いてただろ」

「ば、馬鹿モソ！ あれは、どろり濃厚トマトジュースが鼻から逆流しただけで……！」

「いつも王様はトマトを残すんです、つてメイドの一人が微苦笑してたけど？」

「と、ともかくじや！」

仕切りなおすように咳払いし、指を差していく。

「ちつとは勇者らしい事をしてこい！ 頼むからー。」

「何でだよ！ 僕、別に好きで勇者になつたわけじやないしさあー

!

「勇者の権力使いまくつておるじやが、お前一丁

一 节川シニ イツ 元キマリス !

こんな理由があつてもいいぢやない、人間だもの。

「あー、ついでねえ……。勇者っぽい事つて何だよ」

女性が街を歩く時に見られる構造の問題

「おひ、H口魔者ー。といひては嘘こぼれられたかー?」

「うへせーよ。何が、勇者っぽいとしかわへん」

「ムリじゃない？」
それより、これ食べてみてよ！ 美味く出来た

「思ひたてと」

アンタなあ、彼氏へのお菓子の毒見役を俺にやらすなよ」「

「え？ 」され、お父さん見たよ。」

二〇四

「ありがとう！ 参考にしてある！」

「お、ハーモニカ……。あそんでね……」

「おいおい、君みたいな子に手えだしたら流石に豚箱行きだしさあ

卷一

勇者殿……今日も凄まじい性欲ですねな」

いながら手洗いされたので、何を聞いてなんが！」

七時〇〇分のところ、先づうなだれへ。

親しくしておきたるは勇者の名にて本三五

なーんて考えても埒が明かないんで、適当に歩いていく。
と、空に風船が舞い止がつていふ。螺旋状の上昇、今も

天に召されようとしていた。

「ふーせんがあ……」

「仕方ないでしょ？ 手を離すのが悪いんだから……」

「でも……うつ……うつ……」

「ああもう、泣かないの！」

そんな親子のやり取りを見兼ねて、俺は建物の陰に隠れ、点になりつつある風船へと手をかざした。

空気中の魔素と呼ばれる物質を、自身の精神を触媒に魔力へと変換し、正面に飛ばす。これが、魔術の基礎。

普通は力いっぱいぶつける事しか念頭に無い。魔術は、対魔物や山賊の切り札で、威力が問題でもあるのだ。

しかし、そう言つ連中は決まって馬鹿だ。数をこなして強くなろうとしているから。

必要なのは、効率よく魔素を集める集中力と、大量変換に必要な精神力。そして、受け皿となる己の体力だ。無論、俺はこの二つを幼少より鍛えている。

更にコントロールの修練を積めば、スカートめぐりは当然、こんな事も出来るようになる。

「紡ぎ、そよげ……」

詠唱は魔素を魔力変換し、展開した魔方陣に飛ばす役目を担う。魔方陣に届きさえすれば、何でもいいのだ。下級なら、言葉数も少なく済む。まあ、魔力によりけりだが。

「手繰り寄せる風の腕」
かいな

魔術名を叫ぶのは、イメージを固める為に必要な行為。これもまた、発生させた魔方陣に届かせる事で、発動の引き金となる。ちなみに、イメージさえ出来れば、言葉は何でもいい。事実、今のもイメージに合わせて適当に言つただけだ。

言い忘れたが、変換できる属性は本人の素質に由る。俺は風と水、そして炎が使える。

で、俺が思い描いたのは、風の腕。イメージどおりに顕現した風が、遠く離れた風船を優しく抱き寄せ、こちらまで持つてくる。

泣いていた少女の前に風船を持つていってやり、彼女が持つたと同時に魔術を解く。勿論、気付かれないよう。

「ママ！ ママ！」

「……えつー？ それ、どうしたの？」

「風が吹いてね、ひっそり来てくれたの！ で、持つまでもっててくれたんだよ！」

「……そう。じゃ、感謝しなきゃね」

「誰に？」

「頭がくすんだピンク色の、お兄ちゃんに。ね？」

そんなやり取りを背に聞きながら、キルシユは歩いていく。行く場所は、自分の家だ。

裏路地にある酒場。昼間は酒の営業はしていないのだが、軽食や昼食なんかを食べさせてくれる。

スティングドアを押して入ると、昨日のが残っているのだろう微かな酒臭さと煙草の臭い。それらを埋め尽くすように、料理のよい香りが漂っていた。

店主である男がこちらを見、何かを投げ寄越してくれる。油紙に包まれたそれは、暖かいホットドッグだ。

「ちゃんと食べよ？ お前、男のくせして食が細えからな」「サンキュー」

包みを開けつつ、空いていたカウンター席に腰掛ける。

店内は木造で、そこそこ広い。夜は大柄な客や冒険者などで賑わうが、昼は学者やらも軽食を摂りに来ている。そこそこ繁盛しているのだ。

「どうしたよ。いつも日課もその調子じゃ成績なしか？」

「いや、まだやつてねえ」

マスターたっぷりのそれを齧る。分厚いボイルワインナーと新鮮な葉野菜の食感が見事で、相変わらずピリリと舌を刺激するマスタードソースが最高だ。ホットドッグは、この店が俺にとっての一番だと思う。

そんなこじらりを、毎に星でも見たかのような田で見る店主のワーグナー。

「お前……熱もあるのか!? あの『桃色の脳細胞』とか『煩惱の塊』とか言われてたお前が!?!?」

「……誰が言つてた? 裸に剥いて教会の十字架に一日中逆さにひるして曝してやる!」

「スカートめぐりが特技で、一ヶ月の下着の色を統計しているヤツがそんな事いうのか……」

高尚な日課とは、風の魔術でスカートをめぐり、瞬時に見定めたパンツの色を統計して、この街の性欲推移を図るものである。

この街は純白が六十となり素晴らしい結果を残している。個人的には黒もありだが、たまに見かける紅いのはどうかと思つ。まあ、好き好きだとは思うが。

「それよりも聞いたか? お前みたいなヤツが居るんだと、しかも悪質な」

「ああン? 聞き捨てならねえなそりや!」この街の女性を傷つけるヤツア、この俺が!?

「同じ事を言わせる気か、アホ。……女性だよ。その犯人。ターゲットは、若い男だ」

「はあ……?」

何が楽しいんだよ、それ。

と、カウンターで食事をしていた青年が、ものすごい形相でその話題に食いついてくる。て言うか、それ餡子入りパスタライスじゃん、ゲテモノメニューの。舌大丈夫か?

「オレが……オレが被害にあつたんだ! 初めて出来た彼女とデートしてる時にさ、その女が通り過ぎて、下半身が一瞬で露出しちまつたんだ!」

誰が得するんだ、そんなの。

良く見れば、顔立ちの整つた青年だ。パツと見、神経質そうで、故にモテなかつたのだろう。不憫な話だ。まあ、とりあえず口の周

りの餡子拭けよ。

「彼女からは『……あつた』って言われて、その通り過ぎてつた女の子は『残念、好きじゃないですねえ』って言われて……。で、彼女に……フランだ……」

「「う、うわあ……」」

ワーグナーと一人で、顔を引き攣らせる。そんな、えげつない。男の自信を根こそぎ奪う鎌のよつた言葉を吐く女……なんて恐ろしい。そして餡子を拭け。

「オレが多額の金を払つて情報屋に問い合わせてみても正体不明。ただ、異国の剣やら色んな武器を扱うそうだ」

そう言い終えると、男は袋をカウンターに叩きつけるように置く。中で弾けた音からして、金貨だ。それも、相当枚数の。いやだから拭けよ、餡子。

「頼む、勇者！ ヤツを……ヤツを殺してくれ！」

「ヤダね」

鼻で一蹴し、餡子に塗れて情けない男の面を笑つてみせる。

「殺してなんになる？ お前はその女に見下されたまま、生活しなきやなんねえ。何故、そんなことが出来るんだ？ そんなの俺はごめんだね。根性無しの尻拭いもな」

「あ……」

悔しそうに歯噛みする青年から顔を逸らしつつ、視線だけ向けて、神妙に聞いた。大切な事だ。

「そいつ、可愛いか？」

「あ、え……？ えつと、幼さが残るセクシー系つて言つてた様な

……」

「じゃあ俺の女にする！ 決まりだ、ハーレム計画の一端を担う存在になつてもらわにやな！」

「な、なら……これを軍資金に」

男が次に紡いだとした言葉を、食べかけのホットドッグを口に捻じ込んで黙らせる。餡子と最悪なハーモニーを奏でること、請け合

いだ。

「 その金で次に出来る彼女にプレゼントでも買つてやれ。俺が女口説きに行くのに、何で金が必要なんだよ」

席を立ち、店の奥にある私室に入る。

木造の小さな部屋だ。ベッドと机があり、替えの服がたたんで数セット置いてあるだけの、簡素な部屋。

白い気品のあるズボンと、黒い襟付きのシャツはそのまま。若草色のローブに、激しい動きにも耐え得る革のブーツに履き替える。短刀や小道具を収納したポーチをベルトに括りつけ、準備は万端。店内に戻ると、青年と同じくらいの年齢の男達が、こちらを見ていた。

「お願いします！」

「だーかーらー、俺は女口説きに行くだけだつてのー。ほら、散れ！」

手をパタパタさせて男達を解散させつつ、俺は駆け出し、「紡ぎ、纏え……誘い吹く風の跳ね靴」

魔術を発動させて、文字通り跳んだ。すると、風が身を運んでいく。高い建物へと、誘われるようにな。

上から見下ろす街並みは、とても綺麗だと思つ。

ちゃんと整理されて作つてある石畳の通路に木造や古い石垣で出来た建物。同じく、整理して張り巡らされている用水路。

行きかう人々にはほとんど貧富の差はなく、スラムもない。賑々しい市場を筆頭に、カッコいい、可愛い、逞しい、知的な少年青年が盛りだくさん。

「……いいなあ」

涎が出そう。

「おつと。いけないいけない。この街ではあまり騒ぎにならない

よつにしないと……」

前の街みたいに、不細工でもさい男の人たちから追い回されるのは勘弁だ。

「でも、もう騒ぎになつてんぜ？ 若い男の下半身を通りすがりに露出させる最悪な女の噂」

背後から届く、青年の声。いい声だと思ひ。軽い感じがしているが、それとは裏腹に怜悧さも幾分がある。こちらの対応を決めかね、そしてどういった風にでも対処できると言つた自信と警戒の現われでもあるのだろう。

とりあえず出方を伺つべく、会話を続けてみる。

「そう？ でも、この街にはスカートめぐりを生きがいとしている人もいるみたいだし……」

「ありや趣味だつつの。下着の色の統計をつけるのが、習慣ただけだ。習慣をビリーハリと口出しされる謂れはないね」

「凄い理屈」

言いつつ、振り返つてみた。相手の顔を見ないことは、始まらない。

「え！？」

「おっ！？」

好みをストレートで打ち抜いた男性が、そこにいた。

紫だかピンクだか分からない、中途半端な色の髪を長くし、不思議な模様をした黒のバンダナで適当に髪を止めている。

瞳も同じような色をしていて、黙つていればクールな一枚目という顔立ち。バランスの取れたスタイルも、足の長さも、纏っている服の質も、嫌味にならない程度に上等で、男女共に好かれそうだ。そんな彼は、こちらを見て驚いたような顔をしている。何なのだろうか。

正直に言つと、メッチャ好みだった。

色素の薄い、金とライトブラウンの中間をいく癖のある髪を長くなびかせ、あどけなさを残す可愛らしいが美しい顔をこちらに向ける。

少しだけだが見開いている瞳の色は、蒼。物に動じないのか、知つていたのか、背後から話しかけたのに会話を交わせる余裕もある。性格も、そんなにキツそうではないか。どちらかと言うと、天然系に見える。

が、あまり表情には出ないようだ。苦労をしたか、人を多く殺してきたか、精神に障害があるのか。感情が表に出ない人物は、大抵そんなものだ。

ともあれ、自分より頭一つ低いくらいの身長も、バランスの良いプロポーションも、小洒落た青いドレスも素晴らしい。特にドレスは肩紐が細く、体のラインが強調される上にスリットまで入った大人のイメージで、どこかあどけない彼女と背反しているようで、そこが実にツボである。

「あの、ちょっとズボンを下ろしてくれない？」

「いきなりアグレッシブな発言頂きましたー！　て言うか、それがおかしいだろ！　何でだよ！」

「え……私のショーツも見せなきゃダメ？」

「ケツ、自発的に見せられても意味ねえよ」

「え？　あなた、スカートめぐりの人でしょ？　パンツが見たいんじゃないの？」

「馬ッ鹿野郎！　全然違えよ！」

そう言う事ではないのだ。同好かと思つたら、ロマンを全然分かつていらないらしい。

拳を握り締め、瞳に炎を宿しつつ、力説する。

「恥ずかしながらもじっくりとたくし上げられるのがいいんだ！」

それか、自分でスカートをめくるとかな！　恥ずかしがるつてのが大事なんだよ！　それに、俺自身が見ること見せることに関わっていなパンツに興味ねえ！　それに、パンモロよりパンチラの方が

何か工口いし……

有能である諸君らは、勿論賛同してくれるよな！ 例え理解されなくとも、この胸にくすぐつて何かが反応しているはずだ！

「……へンなの」

首を傾げる少女に向けて、今度はこちらから質問せねばなるまい。「んで、何でお前は男の尊厳をズタズタに引き裂くような真似をしてるんだ？」

「……えっとね。右の太ももに、大きなほくろのある男の人を探してる」

「何で？」

「……仇だから」

彼女の表情は変わらないが、雰囲気が違う。穏やかな普段のものから、波紋も何もない水面のように静かなものへとシフトしている。静かなる殺意だろう。

「……父親の仇か？」

「ううん」

「んじや、母親？」

「違うよ」

「……恋人？」

「正確には、片思いだった。私の、ね」

恋人を、取られたのか。

「那人、幸せにするつて言つてたのに……死んじゃった。片思いの人、自殺しちゃったの。だから、私はあの男を見つけ出して、ぶん殴る」

「だからって、ズボンを切る事は……」

「顔も覚えてないし。覚えてるのは、彼との一夜を偶然見た時に目に付いた、その特徴だけ。いきなりズボンを脱いで、だなんて、聞いてくれるはずないしね」

「だからって、切る事がないだろうに。」

と、彼女が浮かべた微笑は、幼い顔立ちにあまりにも不釣合いで。

大人のような反面、子ども染みた純粹さを覗える。こんな子が暴れたら、相当拙い。

いや、それ以前に！ 今冷静になつて考えてみたが、それちょっとおかしくね？

「……あの男？ 好きだった人は、男なんだろう？」

「うん」

「お前が追つてるのも、男？」

「そうね」

「え、ちょ……つて事は、オトコドウシデスカ……？」

「そうよ」

臆面もなく表情も変える事も無く端的に言つてくれました本当にありがとうございました御座まアツーす！

「う、うわあ……。そりや、ハつ当たりすんのも当然だわな

「え？」

「ん？ いや、そうだろ？ 男にとられたから、その美少年にハつ当たりを……」

「ううん。最初はそのつもりで、探すのもかねてたんだけど……段々、美少年が好きになつて。逆ハーレム計画でも作ろうかなつて。今は、それぞれのナニに感想を言うのが趣味なの」

「発想が凄い方向に飛んでつてるなあオイ！ ……ん？」

逆ハーレム創造を目指している？

ならば、これは……同じ趣向じゃないか！ 実に素晴らしい！

「なあ、俺はハーレムを目指してるんだ。美少年はお前に、美少女は俺に。二人で一緒に、を目指さないか？ ハーレム計画！」

と、こちらをポカーンと口を開けて見てくる女の子。いや、そりや確かにへんな事を言つている自覚はあるが、効率がいい。何より、美少年に相手を取られなくてすむ！ これ、重要。

しばらく考えた後、彼女は柔らかく微笑んで、頷いてくれた。
「……うん、いいよ。じゃ、私からも一つ。無条件で協力する代わりに、ね」

「おう！ 僕は勇者だからな！」

「どこかで右の太ももにほくろのある人に出会つたら、殺すか、私に連れてくるかの二つ。いい？」

「おう！ 協定成立だな。僕はキルシユ。十九歳」

「私はエトワール。十七歳」

「つてなワケで、ちよいとステータスを拝見しまーす！」

「え？」

名前：エトワール

Lv : 6

職業：ウェポンマスター

ステータス

体：27

力：16

技：21

速：23

守：0

魔：0

運：51

特殊技能

剣士の心得、樵の心得、射手の心得、多数戦の心得

「……凄い特技。初めて見た」

空中に浮かんだ文字と数字を見て、彼女 エトワールはかなり驚いているようだ。てか、強いなアンタ。戦わなくてよかつた。

「じゃあ、キルシユのパラメーターも見せて？」

何だか、かなり見劣りしてしまって……まあ、いいか。

「あらよつと！」

名前：キルシユ

Lv : 1

職業：勇者（笑）

ステータス

体：16
力：6
技：10
速：10
守：3
魔：14
運：255

特殊技能
スカートめぐり一級、魔術・風、魔術・水、魔術・炎、傭兵の心得、盗賊の心得

「ふつ……なんで、勇者に（笑）がついてるの？」
「うつせ！ こっちみんな！」
「それにパラメーターが盗賊寄りだよ？」
「ゆ、勇者がみんなマッヂョメンだつたら怖えだろー、俺はイケメン担当！ 文句ないだろ！」
「うん、黙つてたらカツコいい。残念なイケメンかな」
「おおーい！ 残念とか言うなよ！ 僕のシルクのハートがクラッシュしうしちまうよ！」

「それに、勇者の癖に面白おかしくてスケベだし。普通、真面目でしょ？」

「面白おかしくてスケベな勇者でもいいじゃん！ それに決めるとかは、びしつと決めるぜ！」

カツコいレポーズを取るも、彼女はどう吹く風眺めている。いや、じつち見ゆるよ。

溜息を吐きつつ、真っ直ぐにエトワールを見つめる。
視線に気付いてか、彼女も振り返つて、俺の目をじつと見つめてきた。

「ま、何にせよ……」
「うん……」

じぢりからともなく、拳を突き出し、

「一蓮托生つてな」

今、この空に近いこの場所で、

「うん。よろしく、キルシユ」

ハーレム建設の夢への協力を、

ここに誓つたのだった。

序章 ハーレム＆逆ハーレム（後書き）

……うん、完全に勢いですね。他のもかけよと思いますが、筆が進まないのでこちらを乗せて見ました。

一章 魔の森のロリババア 前編

ハーレム同盟結託、その次の日。

王の召集を受けた俺は、その場所に来ていた。相変わらず、馬鹿みたいに高そうなカーペットだ。醤油でも垂らしてやろうか。

「……んで、何か用？」

隣にはエトワール。

二人で城に行き、王と向かい合つてしているのだ。王はこちらを見、こめかみを押された後、静かに尋ねてきた。

「その方は誰じゃ？」

「逆ハーレムを目指すつて言つから、俺と手を組んでもらつたヤツ。あ、街で噂の若い男をひん剥いてるヤツな」

「お前のパーティーは何かがおかしいぞ！ 何でよりによつてそんなヤツを仲間にしとるんだ！」

「それは……」

「私達が……」

「熱い志で一蓮托生を結んだからー。」「

「何じやその無駄なコンビネーションー。息合いで過ぎじゃうつにー。キメポーズまでクロスするようにピッタリだつたのは予想外だ。意外と、波長が合うのかもしれない。」

豪奢な玉座に座りなおしつつ、王は指を鳴らした。いや、鳴らさうとしてかすれた音しか出なかつた。

「クスクス……」「クスクス……」

「や、やかましい！ こそそと笑うでないわあ！ ……おーい、誰か！ 例のものを！」

と、数人のメイドが何かを持つてくる。

一つは小袋。一つは剣。一つは紋章だ。

小袋の中には金貨が十数枚に銀貨がそこそこ。剣は見たところ実用と装飾の狭間をいく美しい代物。そして紋章は、見覚えのある紫水晶の首飾り。

「おー、これって……『マジックシェイプ』か?」「つむ

変換した魔力を魔方陣に通す必要もなく、思い描いた形に固める事が出来る。魔力の剣とか、そう言つ芸当が可能だ。

要するに、魔力はあるが魔術が扱えない連中が使いたがる物。本職の魔術師には、どう足搔いたって敵わないだろう!」

「俺には必要ないぜ?」

「持つて行け。お前さんの潜在属性外も使用できる。金属系と雷系が使えるぞ?」

「……これから頼む仕事に、必要になるかもしれないってか?」

「どうせ何も考えとらんじゃろつからな、しばらくはワシが仕事を世話してやる」

「はあ? そんなの『めんだね。俺は偉大にして崇高なるハーレム計画の第一歩を軽やかに踏み出したところなんだ。仕事なんて絶対に」

「……森の奥に、魔女がいるのを知つておるか?」

「その話、詳しくお願ひしまーす!」

「す、と笑いを零すエトワール。ああもへ、一々可愛いなアンタ。可愛いは正義、これがオッサンだつたらキレてたと思つ。仕方なさそうに溜息を吐いて、王はゆっくりと話し出した。

「……この街の外れに、森があるのを知つておるか?」

「おー。たまに森の泉に水浴びしにいく若い女の子達が」

「お前はそつち方面から切り離して物事をおぼえて見せんか。……

その森の奥に、魔女が住んでいる。彼女の魔力を我が国に有益な方向に活用させると誓わせるか、魔力を奪うかしてほしい」

「魔力を奪う? それって……」

魔術師の魔力は、肉体がある限り際限なく沸き続けるものだ。限界まで使用したとしても、一度寝れば大半は回復する。

要は、奪つても奪つても出てくると言つ事。それを枯渇させるには、根本から絶つしかないわけで。

「手っ取り早い話、従わなければ首を刎ねて來い。生け捕りにしても構わんぞ？」

至極簡単に言つてくれるが、相手の規模がまだ分からないので、動きようもない。

まずは外見だ。そうじやなれば、そこら辺にいた女性全員を捕らえるか殺すかしなくてはならなくなる。

手始めに、俺は質問を投げてみた。

「そいつ、いくつだよ」

「一百と少しじゃと聞いておる」

BBAじゃねえか！

「はっ、馬鹿馬鹿しい！　俺は老人介護の博愛精神なんざにみち溢れてねえんだよ！　他のヤツがやれってんだ」

「それは残念じやな。その魔力で成長と寿命を止め、童女の外見にとどめておるそうじやが……しかも処女」

「誰もやらなきや、俺がやる！　そう、勇者は期待に応えますとも！」

フウーハハハハハハハハハ　　ツ！　　「

勇者らしくない高笑いは、城内に響き渡つていたという。

堅苦しい雰囲気は皆無だつたのだが、ああいつた畏まつた場所が苦手なのだろう。城の外まで出ると、エトワールは気持ち良さそうに背筋を伸ばしつつ、横目でこちらを見て話しかけてきた。

「……で、どうするの？」

「フツフツフ……。ロリババアと言つ稀有な属性から手籠めにする機会がこようとは……！」

ロリババアの定義に関しては、個人的に二つ定めている。

一つは、童女の身体にあつた年齢で、言葉遣いやら好みが婆臭い人物。

もう一つは、ロリな外見ながら、かなりの高齢をいく人物だ。個的に、こっちの方が好みではある。だって合法ロリなんだもん！

浮き足立つ俺とは裏腹に、エトワールは冷静な見解を見せてくれる。

「でも、やめた方がいいと思うわ。魔力で身体を若く出来るんなら、相当強い魔力を持つてるはずだし」

「まあ安心しどけよ。俺、対魔術戦じや無敗だしな」

「何で？」

秘策があるのは、まだ黙つておいた方がいい。魔素や空氣のうねりで精神を読めるレベルの魔術師なら、ばれる可能性が飛躍的に上がってしまうからだ。まあ、そんなレベルなら世界をとっくに滅ぼしているだろうが。

とりあえず歯を見せながら笑う。驚きの、白やー。柔らかくはないが。

「期待してな。んで、貰った剣はどうだ？」

王から貰つた剣は、エトワールに渡した。あのパラメーター的にあつてているだろう。剣士の心得もあつたし。

が、当の本人は不満そうだ。その場で半分だけ抜いて見せてくれる。

「鏡みたいね、この刀身。斬れるのかな、これで」

ミラーフラッシュと呼ばれる鏡のような刀身になる仕上がりで、傷一つないブロードソードの腹には、イマイチと言ひたげなエトワールの顔が映つていた。

「王の私物なんだから、何かしら効力があるんだろうけどな

「知らないの？」

「見覚えがないんだよ。書庫なら片つ端から読み潰したけど、そんなものはなかつたかな」

「本が好きなの？」

「いんや？ 知つてれば、傭兵のお姉さんと意気投合して話できるかなーって思つて、武器辞典五十冊丸暗記しただけだ」

「その口に関する力の源が知りたいわね」

「そりゃあ当然、俺の息子からさ」

「え、息子がいるの？」

「ああ、股間の方に一人な」

「それは素敵ね。是非、ここで見せて欲しいわ」

「フツ……脱いでいいのは、脱がされる覚悟のあるヤツだけだ」

先を歩いていたエトワールが立ち止まり、俺も足を止める。

伝わるのは張り詰めた空気。互いの意見が対立し、互いがどうし

てもその意見を通したい時

「じゃ、脱がしちゃおうか」

「その前にパンツを奪われないよう氣を付けるほうが先だぜ？」

「あ、私今日は履いてない」

「えつ！？ マジでつ！？」

そう、人間は武力解決を念頭に置く。

目にも留まらぬ速さで踏み込んできたエトワール。先程の剣を抜き放ち、軽々と一閃を放つ。

城から外れて、人一人いない街道に出ている。周りの建物の為か、窮屈な動きだ。それなら、こちらに歩があるかもしれない。絶対にあのスカートを持ち上げてやる！

バックステップで避け、高さを意識して跳んだ。

「紡ぎ、駆ける……天駆ける羽馬の靴！」

ショートブーツに風の魔力である緑色の輝きが纏わり付き、俺を宙にどどめてくれる。更に高い場所へと走る為、空気の波に乗つたり滑空したり出来る靴を魔術で作つたのだ。

が、

「嘘おつ！？」

「あら、ホントよ？」

遙か十メートルは飛んでいるのだが、跳躍でエトワールは追いついてきたのだ。絶対、こいつ人間じゃねえ！

「こなくそ……っ！」

呪文を言つてゐる余裕はない。ただ、もう適当にぶちまけとけ！

「おりやああああああああああああああああああああああ

っ！」

！」

広さを意識して、今度は水の魔術を放つ。
叫びにありつたけの魔力を掻き集めて、展開したのだ。元々、イメージなんて幾千もの魔術を放てば思い浮かんでくるもの。詠唱は必要ない。とは言え、最近はそれを知らず、詠唱をしている馬鹿な輩もいるようだが。

魔方陣から流れ出たのは、威力はない水のヴェール。が、重さはかなりのもの。

「くつ……！」

空中にいたエトワールを水は叩き落し、そして……

「おっほお！ これは……！」

水に濡れ、よりピツタリとしたドレスが、エトワールの殺人的なボディーラインを強調させていた。やはり胸元はかなりふくよかでいて、なのに腰は細く、全体的にすらっとしたシルエットが堪りません！ いやー、『J駆走様です！

が、刹那にその姿は消え、気付けば眼前に穏やかな微笑をたたえた彼女の姿が。

「そこいつ……！」

俺の股間へ伸ばされる彼女のしなやかな手。思わず、悲鳴を上げてしまう。

「いやんつ馬鹿！ どこ触つてんのよエッチー！ だ、誰にも見せた事ないんだからね！ 勘違いしないでよ！」

と、触る直前で、どちらも動きがピタリと止まる。
微妙な空氣の中……恐る恐る、エトワールが尋ねてきた。

「…………え？ 今の、素なの？」

「や、ち、違う！ サっきのは俺の中の女性がちょっと田代覚めただけで……！」

俺の素晴らしい理由^{いいわけ}を聞かず、エトワールは生暖かい微笑を浮かべて、こちらの肩をぽんぽんと叩いてくる。

「今度、スカート貸してあげるね」

「ちやうねん……！ ホンマ、今の無しや！ そんな認識されてもうたら、もうお婿に行かれへんがな……」

「うんうん、大丈夫。大丈夫だよ？」

「やめてー！ その生暖かい目をヤメテえええええつ……」
実際に間抜けな叫びが、悲しく街道に木霊した。

「何じや……。また、人が来るのか」

そう呟いて、安楽椅子に腰掛ける。

もう誰にも会いたくない。誰にも、関わりたくない。
だから……そつとしておいて。

「……消してやる」

白く細い手がゆがみ、青白い閃光を生んだ。

一瞬照らされたその顔は、白く……悲壮な顔をしていた。

「と言づわけで、やつてまいりました。ここが現場の泉です」

小声でリポートしつつ、木陰に隠れて泉ではしゃぎあう女子グループと少年のグループを、それぞれ俺とエトワールは眺めていた。

「どうよ。この位置は見つからない上に、良く見えるんだぜ？」

「もうここに家を建てたいわ。はい、これお礼のパンツ」

ありがたく、妙に暖かいそれを受け取り、ポケットの中にしまつておく。え、さりげなく何やつてんだって？ ヘヘーん、羨ましいだろ。シルクの白だぜ？

しかし、やはりエメラキスカは女性の平均水準が高い。勿論、美人さだ。

エトワールみたいに抜群の美少女とまでいかずとも、結構可愛い子や綺麗な人は多い。水掛け合ひ、甲高い声ではしゃいでいる娘も、そこそこのレベルだ。

少年達の方は、やんちゃ盛りらしい。流石にショタコンではないらしく、エトワールはいつもの穏やかな笑みを浮かべて、鼻血を滝のように流していた。……「めん、ストライクゾーンみたいだつたよ。

「なぜかしら、この胸の高鳴り……」

「やめとけ、犯罪だから」

「でも、青い果実から美味しく育てるのは憧れじゃない?」

「……お前、天才だな!」

これからはそんなことも考えて視野を広げようと決めた 刹那だ。

突如、雷雲が群れてくる。キャツキヤウフフ（？）とはしゃいでいる、一般人の下へ

魔力の気配を感じ取った俺は、エトワールが気付くよりも先に精神を集中させた。

「キルシユ！」

「おう！ 流れ、弾け。展開するは壯麗たる蒼……清き天空の雨傘！」

雲の範囲に合わせる事で、中級規模の魔術を使わざるを得なかつた。詠唱が長いのも、中級であるが故。
そこそこしんどいが、ここで女性達を餌食にしてしまう方がよっぽど辛い！

電気は水を通すと言われているので、一見ミステイクに見える。が、それは水の中にある物質に電撃が走るだけ。水の純度を高め俗に清水と呼ばれるレベルにすると、雷を弾けるのだ。それも含め、中級でなくてはならなかつた。

そして、展開したのは水の膜。ドーム状に広がって、それが泉全体を覆いつくした刹那、巨大な雷光が頂点へと落ちていく。

その衝撃はかなりのもので、展開していた水を集めても、あの雷には及ばないだろう。根本的に、注いだ魔力の絶対量が違う。

「くそつ……！ いうなりや……！」

古代の文献で見つけて、思わず燃やしてしまった最悪な魔術。アレを放つしかないか。

「紡ぎ、化せ。展開するは堂々たる縁。あらゆるものを風化させ、侵食せよ…」

風化の呪文。これは、鉄や生命さえも奪いつくす、黒い風。

「 悪魔が払う漆黒の破風！」

豪つ！ と黒い風が生じ、雷撃とぶつかる。

雷は粒子の集まりらしい。魔術では、それを魔素で作れるらしいのだが、雷は才能がなかつたので『マジックショイプ』無しでの生成は不可能である。

ともあれ、俺が放つた最悪の古代魔術は粒子をも風化させ、雷を奪いつくして霧散した。

「 ……凄いわね。って、大丈夫？」

「 ああ、心配すんな……」

呼吸が荒くなり、頭痛が酷くなる。古代魔術のような強力なものを使攻で編み上げるのは至難の業だ。出来たとしても、精神力は愚か、体力まで持つていかかる。

特に、水の純度を高めるとか、炎の温度を変えるとか、オプションをつけると余計にしんどい。

はあはあ、とこちらの息を見て、ヒトワールは神妙に頷いた。

「発情、してるんだよね？」

「俺は病氣か何かか!? 年がら年中発情して……るかもしかんが、魔術を使った後、性的興奮なんかするか！ それなら俺の股間は、毎時エレクトオブザファイーバーだつての！」

「でも、魔術師の次は賢者でしょ？」

「その賢者じやねえよ…………ああ、つたく！ それよりも、彼女等を避難させてくれ。ちょいと俺を休憩させてくれよ…………」

「うん、行ってくる

「四十秒で支度しな

その背に声を掛けつつ、木陰に寄りかかる。やはり、無茶が過ぎ

たようだ。これからは、もう少しゆっくり詠唱しよう。

と、腹の虫が鳴る。そういえば、彼女と別れてその翌日まで、何も食べていない。

「……習慣、か」

思い出すのは、魔術の修練。

空腹でイメージが出来ないケースが絶対にないよに、修行の際は常に空腹で行うのがキルシユの修行法だった。おかげで、今も昔も食が細い。

だから、空腹でも戦える。ただ……エネルギーが切れると同時に、倒れてしまうが。

「……よし

呼吸が整い、頭痛も治まった。

エトワールがいないうちに、キルシユは魔力の発生源を辿る。

先程の雷雲は、魔力の糸を介して魔方陣に魔力を伝達していた。確かに出来るが……現実的ではない。超常的な魔術の更に上を行く、神技とも呼べそうなものだろう。

使えるような人間は、人間の含有できる魔力を超えている。魔族のハーフやら、高位な魔族　例えば、ヴァンパイアロードでも、それは不可能。魔力が足らな過ぎる。ドラゴンが人化すれば可能かもしれないが、それでもレッド、ブラック、ホワイトと言った上種族ないと出来ないだろう。

『マジックシェイプ』　それを介せば可能だが、糸状に変化するものなんて、使えない。見慣れているし、糸に勢いを持たせるのは難しい。

可能性として考えられるのは一つ。

一つは、もう凄まじい魔力を持つている事。俗に言つ、力技である。魔力に物を言わせて、魔方陣を遠くに展開し、糸ではなく魔素の本流として細い道を作り、魔方陣と繋げる。こうすれば、音声で魔力を届けるまでもなく、発動可能だ。ただ、眩暈がするほどの魔力が要る。

もう一つは、『マジックシェイプ』に似た道具で、魔術に指向性を持たせる『魔術指揮棒^{マジックタクト}』要は杖だ。

魔術師が使う杖は、魔力を伝達しやすい白金などで出来た物で、物によつては魔力を秘めた宝石 魔石を先端に頂くものがある。杖の先から放射するイメージなら、ブレもなく、また無駄な魔力も必要なく、そして魔石の補助により、容易になるのだ。まあ、こちらも正規に購入するとなると、国の許可証やら貴族の屋敷が三つ買えるような金額やら……違う意味で眩量のしそうな条件が山積み。そんなヤツが相手なら、エトワールは向かない。

魔力を所有していない人物に対して、魔力はダイレクトに影響を及ぼす。

十の魔力で、例えば俺が魔術を受けたとする。俺の持つている十四の魔力には敵わず、結果、ダメージなし。

だが、魔力ゼロの彼女が当たれば 十のダメージがそのまま通る。危険なのだ。

特に雷を使うなら、かすっただけでも致命傷だ。反対に、魔力を持つ相手にはそうそう効くようなものではない。魔素の粒子による攻撃だからだ。

光、雷、炎、風、水、土、金属、闇の順番に、魔力を持たないものに有効である。魔素を固め、変換するのに時間が掛かる土や金属、闇は、他の才能がない限りはあまり使用されない。

なーんて語つては見たが、結局は力技で何とかなる。雷の魔術だろうが、圧倒する魔力さえあれば、どんな相手も潰せるのだから。
「……それに、秘策もあるしな」
笑みを浮かべつつ、目的の場所まで歩くキルシュ。
その後を追う、騎士達の影に気付く事無く。

一章 魔の森のロリババア 前編（後書き）

御感想、ありがとうございます。

突つ込みどころも満載な勇者ですが、優しいこの男をどうか見守つてやってください。

一章 魔の森のロリババア 後編（前書き）

注意。本小説で行われている行為は、絶対に真似しないで下さい。
犯罪です。

誰にも踏み込んで欲しくない領域を、誰もが持っている。それは物理的な空間だったり、心理的な場所だったり。個人個人において違うだろう。

人は無意識のうちに、そこから人を遠ざける。よほど親しい人物でないと、踏み込んでもどうにもならず、気まずくなるのだし。私はそれが人一倍に広くなつたと思う。だから、誰にも……もう居場所を奪わないで欲しい。

が、そんな願いは知らんとばかりに

「おっじやまつしまーす！」

何故か窓から侵入してきた優男は、今までの概念や私の気持ちを、スタイルッシュに粉碎していった。

窓破壊まで、五十秒前の話。

俺は眼前のドアを見つめ、顎を撫でた。

（うーん、着替えを覗くべきだろうか。いや、相手は遠隔で魔術を放てる相手だ。気配を消しているとは言え、何となく気付いているだろうな）

そんな事を考えつつ、他に入り口できる場所を遠目で探していく。正面に入り口一つ。後は、窓が四つと、なんとシンプルな建物だろ。驚きである。

（堂々と正面から突入するのは、馬鹿のやることだな。友好的に、且つ俺が馬鹿だとカゲゴライズされないようにするには……！）

大きめの窓を見て、俺は助走をつけつつ、音もなく跳んだ。

「スタイルッシュ おっじやまつしまーす！」

言いつつ、窓から進入する。え、その結論はおかしい？ うるせ

え！ ロリババアを前にして俺の興奮は最高潮なんだよ！ 少しく

らい適 当でもいいじゃん！

窓を粉碎し、
気の床に降り立つことに成功。
流石は俺だ。

「な、何じゃお前……！」

深みのある高い声が、戸惑いを隠しきれずに揺れている。
彼女の方へと振り返りつつ、東洋のカブキ……だったか？
なポーズを真似つつ、見得を切つてみた。

「俺様、スタイルッシュに参上！」

「いや、動くでない！ 破片が散らばるだろ？」

「あ、カーナン...」

頭を下げる、丁寧にガラスを片付けていく童女を見
田を見張

つ
た。

魔術師限定だが、髪の色で大体才能は判別がつく。俺は炎の才能が強から紅系。それに氷の青と、『

で、くすんだピンクのやわらかな色合いになっています。

彼女は、薄緑掛かつた白髪だった。光と雷を有しているらしいが、
「やそいゆ二二ナリモ！」

「奇麗だな、その髪!! ちよ
いやでんた」と二十一

「な、なんじや!? お、お前、ちよ、お、せめんか!!

た た た た た た た

癡のある心

気持ちがいい。この艶と弾力、それに加えていい匂いがする！ 最

高です！

「こいつ！ 近付くなあああああ う！」

『政治小説の歴史』

突如、叫びで発動させた電流に身を拘束される。

憤然と無い胸をそらして、少女は一いちを慄然と青い瞳で睥睨す。
「可愛い。」

「フシ。」この言葉がわざわざ残された。「この電流、おまえも耐え切れまい」と、おじいさんはいつの間にか口をつぶしてしまった。

？」
「おまえがおれの火薬箱を盗むつもりはないだろ？」
「うーん、まあ、それもあんまりないかな。」

- 10 -

「…………なんじや？」「…………」

「……………」

つ！

な
ぢよ
えええええええ
ー！？

五百三十五

快楽に変換できる。セルフ・M・スイッチである。

すんごくいいつ！！

「ちよ、よ、寄るでない！ 気色悪いぞ、お前えー。」

? ビリーテレとかわけわからんジャンルに萌えるお前らも、共感してくれるよな!

愛なんだろ？」

「何故そこにある!? 全力全開で拒否しておるのか分からんのか!」「その後、全力全開で愛してくれるんですね！ 分かります！」

「お前！？ もう、もう一えがこをねつ

高速の魔弾。多分、光の弾だろう。一瞬で、しかも動搖した状態から放たれたのにも拘らず、必殺の威力を誇つていて見えた。

彼女が叫ぶのとほぼ同時に完成した魔術を放つ。

水を通った光は屈折し、俺から僅かに外れ、奥の窓を吹っ飛ばし消えた。危なー危なー！

が、彼女は本気の殺意を以つて、一いちらを睨みつけてくる。まるで、拗ねた幼子のように。

「先程の魔術を防いだのは、お前か」

「凄いつしょ！？ これが俺の勇者たる由縁だぜ！」

「……警告する。どこかへ行つて、もう関わらないでくれ」

「無視かい。泣いやうぞ、寂しいし。

「何でそんな事言つんだ？ つれないぜ。こーんな暗い森にいるか

ら、考え捻じ曲がつちまうんだよ」

「そうか。なら、そんな女と関わるな。頼むから……一人にしてく
れ」

重い、雰囲気だ。

何が彼女をそうさせているのかは分からぬが、何か根深いものを感じる。人生経験で言えば、トラウマに近い部類の拒絶に似ていた。

「私は……五百歳になる」

「え？ 見えねえよ」

「当然だ。……私の中の魔力が強すぎて制御できず、成長が止まっているのだからな」

自嘲的な笑みを浮かべ、彼女はゆっくりと椅子に腰掛けた。

「私は貧しい家庭に生まれて、ぬくぬくと育つた。この年齢まで、魔術の才がなかつただの少女だった。ある日の事だつたよ。突然村を襲つた凄まじい闇の魔力にあてられ、私の中に眠つていた魔力が起きてしまつたんだ」

魔力を持つものは、先天的か後天的かに分かれること。

魔術師の家に生まれれば大抵は魔力をもち、極まれに一般家庭からも誕生する事がある。

が、後天的は、魔力の才を持ち、何らかの形で魔力が呼び覚まされたりする突発型だ。専門知識も何も持たない状態で放り出され、暴走した例も少なくない。

ましてや、闇の魔力だ。何らかの影響を、人体に「与えたに違ひない。

「……私はな、人の身であると同時に、その闇の魔力に中てられ、

化け物の姿として認識される事になつたのだよ

「俺には普通に見えるけど?」

「そうだな。魔力を持っているからだろ?。……それ以外は、思わず石から剣、大砲まで持ち出されるほどの、醜悪な化け物に見えるんだそうだ。呪い、だらうな」

やはり表情を変えず、淡々と彼女は言葉を紡いでいく。

「最初の村は追い出され、気持ち悪がられて誰にも近付いてもらえず、だつたら破壊しようとした結果、生き残った魔術師の間で魔女と呼ばれるようになつた。……それだけだ。一般人には風に音声を乗せて警告をしているが、入ってくるとなれば迎え撃たねば大きな騒ぎになる。もう、静かでいたいんだよ……」

そう語る彼女の瞳に、ランプの輝きが反射している。美しい、涙。悲しい、涙。

ずつと一人で、誰にもその苦しさを言えず、溜め込み……諦めていく。

届く場所に手が届かなくて。当たり前の幸せさえ、彼女は映してくれない。

「目にいく魔力を抑えて、見てみるといい」

言われたとおりにし……目を瞑つてしまつ。

闇が纏わり付き、狐だか熊だか分からぬシルエットが彼女を覆つてゐる。もはや人としての原型はなく、常闇を纏つてゐるかのようだ。

彼女はそれを見て、悲しそうに目を伏せる。

「……そうだ。お前ももう行くといい。こんなおぞましい輩に付き合つても得がないだろ?。ああそうだ、勇者なのだろ?。ならば、私を討て」

ある種の清々しい表情を浮かべ、彼女は手を広げて、迎え入れる仕草をしてみせる。

「お前になら、構わん。もう疲れた、休ませてくれ……」

立ち上がり、彼女はそつと目を閉じた。これは……好機?

「それじゃ……」

すかさず近寄り その長袖のローブを一気に翻した。

「わーおー レースの白ー 可愛いパンティーちゃんつー！」

彼女は顔に青筋を立てつつ、何かを必死に堪えていくようなトンで質問を投げ掛けてきた。

「何を……やつとるんだ、お前は」

「何つて？ 僕がここに来た目的だけど？」

「……経緯を話してみる」

「(口)に合法口りがいるって言つから、パンツを拌み、出来れば頂戴しようかなあと……ぐふふ、いやらしいですな！ レースだなんて！」

「お・ま・え・はあ……ー！」

「ほふつー？」

白い綺麗な足の膝を顔面に貰い、倒れてしまつ。痛い。でも、僕、満足！

「勇者ではないのか！？ (口)で悪を挫くのが、勇者では」

「悪つて、何だよ」

そう、腹が立つ。

「勇者が悪を挫くのは定番だわな。でもよ、悪つてなんだ？」

分からぬのだ。正義とか悪とか、そんな観念が。

「例えば貧しい少年はパンを盗んだ。逃げ果せた少年は、貧しい子ども達にそれを分け与えた。子ども達から見れば少年は正義の英雄だし、パン屋から見ればつるし上げたい悪者だ。明確な基準なんてないし、それでいいんだよ」

「だが、私は魔女で……」

「処女なのに？」

「い、言つた！ と言つた、何故知つておるー！」

「まあまあ。呪いなんて、どこ吹く風さー。きっと、風が解決してくれるだろうよー！」

飄々と受け流す俺に、とうとう怒ったのか、可愛い顔を吊り上げ

て、彼女はまくし立ててくれる。

「お前は……！　お前はなんなんだ！　私の過去を聞いた、醜い姿も見た！　なら、何故そうしていられる！」

「同情でもして欲しかったのか？」

「な、なんだと……？」

「ああつらいねー、大変だったねーとか何とか言って、抱き寄せてやれば満足だと？　ほざけよ、婆さん。俺は俺がしたいように行動してるんだ、アホ臭えんだよ」

「……それ以上言つてみろ！」

怒りの形相で、感情のままに膨大な魔力が型を為す。輝きは膨張して溢れ、勢いとなつて家内をめちゃくちゃにしていった。

「俺はな、目の前にいる女の子を口説くのが目的なんだよ！　過去とか醜い姿だとか、そんなもんで混ぜつ返すな！」

「な、なに……？」

急に輝きがしほみ、間抜けな声を彼女は漏らす。

そこですかさず、ウインクを投げてみた。キラッ と。

「俺のハーレムにならないか！？　ぜつてえ、損はさせねえよ！」

堂々と言い放つた俺を、何故だか彼女は呆けて眺めていた。

ふむ、ダメだったか。なら、最後にもう一度、あの白を曰に焼き付けておこう。

「紡ぎ、払え。展開するは堂々たる縁。悪しき思いを風に乗せ、打ち上げる。天へと誘う破邪の清風！」

少しひんやりとした風が上昇気流となつて、思いつきり裾を持ち上げ、少し膨らんできている胸元辺りまで服をたくし上げた。うーん、絶景哉。

「いやー、」J馳走様です

「…………」「！」

彼女の咳きによつて、緑色の輝きが曰の前で収束し、

「どこかに行つてしまええええええ　ツー！」

「ありがとうございまあああああ

すつー！」

叫びによつて放たれた魔術によつて、俺の体は砲弾のよつに家をぶち抜き、泉へと飛んでいったとぞ。

命令を受けていた騎士たちは、勇者キルシュが敗走したと見るなり、小さな家屋へ突入する。

「あ……っ!?」

そこにいた少女は、何かとてつもなく怯えていた。多分、あの変態勇者に何かされたのだろう、可哀想に。

「大丈夫かい？ あの変態勇者のことは、犬のフンでも踏んづけたと思つてくれればいいよ」

「フンだけにて？ お前、全然笑えねえよアホか」

「そんな意図ねえよ！？ つか、オヤジじやねえ！」

「それこそ言つてねえし。そういうやお前幾つだつけ？」

「三十五」

「オヤジじやねえか！ 何見栄張つてんだよ」

「あ、あの……」

「うん？」

「あなた、魔力は……」

変な事を聞くものだ。騎士は、魔力を持たない者がなれるのに。魔術騎士は気取った格好をしているが、俺たち騎士は実戦的な鎧装備で臨む。昔の人間でなければ、一目で分かるというのに。

「そんなものないよ。そんなことより君も、こんなところにいちゃ危ないよ？ 魔女が出るつて噂だからね。その魔女はいないみたいだけど、君……知ってる？」

「し、しらない……」

「そりが、それじゃあ、気をつけてね」

すぐにこの事を報告しなければ。

だが、気になつたのは……あの少女が何故か、涙を流して、愛しそうに壊れた窓を見つめている事だった。

「ふーん、そんな事があつたんだー」

エトワールは話半分にその事を聞きつつ、ミートスペゲティをほおばつている。

ミートソースを指で拭つてやりながら、泉でびしょびしょになつた服を着替えた俺が溜息を吐いた。勿論、恍惚の。

「あの白い肌に脚線、幼児体型つてのがまたツボだつたんだがなあ……」

「それにしても、同志を置いていくなんて……酷いわね」

「だから、奢つてんじやんよ。ミートスペにコンソメスープ」
流石に俺も腹が減り、今はラーメンを食べている。何か異国の食べ物らしいが、美味しいので細かいことは気にしていない。気にしちゃいけない。

「で、その闇の力つてなんだつたの？」

「ああ……最近まで解除方法がなかつた、呪いの魔術だよ。多分、闇属性の魔術に巻き込まれた時、その惡意が闇を寄り代に関係のないヤツにまで触れたんじやないか？　闇は、金属よりも質量があるからな」

「どうやつたら解除できるの？」

「並の術者には出来ない芸当。根本から、その呪いを高純度の魔力で吹つ飛ばしてしまえばいいんだ。魔力が高い相手に対して、高純度な魔力を編んで放つってのは、ほぼ確実に無力化されつからな。だから、限界にまで極めたものをぶつけるしかなくなる。水は集めると圧殺しちまつし、だから風を選んだわけ。清水の方が簡単だけどな」

「なるほどね。だから、泉に落ちたとき、動けなかつたんだ」

「そう言つこと」

黄色い麺を啜つていると、更にエトワールは尋ねてくる。

「ねえ、結局は骨折り損じやない？」

「それでもねえよ。俺は一人の女の子を導いた。それに……」

「それに？」

「ちゃんと、元も取つたからな！」

笑顔で俺が掲げたのは 純白のレースパンティー。

魔の森で悲鳴染みた少女の声が響いたらしいのだが、それはまた別の話である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7655y/>

スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

2011年11月27日19時04分発行